

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

人類学的支援とは：機関研究：
「包摂と自律の人間学」領域 支援の人類学：
グローバルな互惠性の構築に向けて（2009-2012）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5546

機関研究 ● 「包摂と自律の人間学」領域
支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて（2009-2012）

本機関研究プロジェクトは2012年度が最終年度にあたる。昨年度までに国立民族学博物館所属の共同研究メンバーが中心となり、支援活動に関する6回の国際シンポジウムを開催してきた。それらはフェアトレード、無国籍者支援、国際協力ボランティア等の支援活動に焦点をあてたもので、本プロジェクトの各論研究に相当した。

2012年度はこれらの研究を総括する目的で、3つのワークショップを企画した。本稿では、その内のすでに終了した2つのワークショップの内容を紹介する。そこで鍵となる概念は「人類学的支援」である。支援活動について研究している人類学者自身が、どのように支援活動に貢献できるかを考えることで、各論研究を俯瞰する視座を得ようと試みた。

人類学的支援とはなにか

2012年6月23日、第46回日本文化人類学会研究大会（広島大学）の分科会の形で、「グローバル支援の人類学：支援研究から人類学的支援へ」ワークショップを開催した。筆者が人類学的支援という言葉ワークショップの副題に含めた理由は、支援活動に関する研究成果が、支援の実践に活かされなければ意味がないと考え、支援者としての人類学者の姿を明示したいと思ったからである。ワークショップでは、筆者の趣旨説明に続き、岸上伸啓（国立民族学博物館）「カナダにおける都市先住民イヌイトをめぐる支援活動」、関根久雄（筑波大学）「人類学的評価という協働：ある『支援』の試み」、白川千尋（国立民族学博物館）「青年海外協力隊をめぐる支援

活動」、筆者「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」、および陳天璽（国立民族学博物館）「日本における無国籍者をめぐる支援活動」の5つの研究発表を行なった。これに対し亀井伸孝（愛知教育大学）と清水展（京都大学）がコメントした。

亀井からは、1) 人類学的支援において支援と調査の関係はどうなっているのか、2) 人類学的支援の特色はなにか、という2つの質問が寄せられた。1) に対する亀井の立場は、支援と理解（調査）は不可分というものである（小國・亀井・飯嶋2011）。確かに、支援活動が展開する場でフィールドワークを行なう場合、どこまでが理解するための調査で、どこから先が理解した成果を活用した支援であるかを分けることは困難であろう。しかし筆者は、理念的には調査と支援を異なるものとして意識しておくべきだと思う。人類学的支援とは、人類学的理解に基づく支援という意味である。調査の途中、理解が不十分な段階で、調査が支援的な意味を帯びるとは、調査地の政治関係に無防備に巻き込まれる可能性があり、危険である。また筆者が目指す人類学的支援とは、調査中のフィールドにおける活動ばかりではない。フィールドを離れて、支援活動の評価結果をその関係者に伝えたり、支援活動への協力を潜在的な支持者に呼びかけたりする等、調査から切り離された支援活動も人類学的支援に含まれる。

亀井の質問2) に対する答えを明確にしておくことは重要である。亀井は、フィールドワーク、文化相対主義、民族誌、ラポール等を、いわば人類学者の道具箱のツールとして意識し、支援活動にこれらを効果的に使うことはできないかと提案した。筆者もこれには異論はないが、肝心なのは、こうしたツールを使って支援のプロセスを丁寧に理解していくことだと考える。具体的な事例を仔細に検討しながら、支援を必要とする状況がなぜ生じたのか、支援活動がその状況をどう改善し、新たにどのような問題を生み出しているのか等、支援活動の複雑なプロセスを把握することが重要である。こうした理解によって、かならずしも人類学の発想を伴わない既存の支援活動を建設的に批判し、質的な改善を促す効果が期待できよう。たとえばワークショップで、関根が発表した文化的評価4項目は、開発援助プロジェクトの評価手法として標準化している5項目評価を補完するものであるし、筆者のフェアトレード研究は、フェアトレードの認証機関が行なうモニタリングを、地域社会の側から捉えなおす試みである。

もう1人のコメンテーターである清水からは、人類学的支援は成立しないという挑発的な発言があった。人類学者は、たとえば医者や農業技術者とは異なり、人々の窮状に直接対処できる専門技術をもっていないので、人類学者の活動は「支援」という言葉にそぐわないというのが、その理由である。とはいえ清水は、支援への「人類学的介入」は可能かもしれないと付け加えた。時間的制約のため、この概念をワークショップでは十分議論できなかったが、翌日の清水自

みぽ 国際ワークショップ

国立民族学博物館

国際ワークショップ「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」
Core Research Project "The Anthropology of Supporting: Constructing Global reciprocity"

International Workshop

**グローバル支援
のための
実践人類学**

研究と実践の
キャリア・プランニング

Practicing Anthropology for Global Supporting:
Planning a Career in Research and International Support Activities

文化人類学・開発学・地域研究など研究途上でフィールドワークを行う研究者自身が、どのような支援活動ができるかを議論します。
本ワークショップに参加することで、支援活動を軸に研究と実践を調べるための多くのヒントを得ることができると考えます。特に、支援活動を一つのキャリア活動として考えたい若手研究者の参加を歓迎します。

日時 2012年12月15日(土) 13:00~17:00
December 15, 2012 (Sat.)

場所 国立民族学博物館4thセミナー室
National Museum of Ethnology, 4th Seminar Room

主催：国立民族学博物館 後援：日本文化人類学会 / 国際開発学会

国際ワークショップ「グローバル支援のための実践人類学—研究と実践のキャリア・プランニング」のチラシ。人類学者が支援活動を職業とする方法について検討した。

身の発表（清水 2012）から、人類学的介入の意味をうかがうことができた。フィリピンのピナトゥボ山の噴火によって被災した先住民アエタの人々との関わりを振り返り、清水は、成りゆきに巻き込まれ、現地の人々や支援活動を行なう NGO との「腐れ縁」としがらみの中で、思いもよらぬ研究が展開したことを語り、時には積極的にアエタの人々の問題解決にコミットしたことに触れた。おそらく人類学的介入とは、このような調査地の人々との長期にわたるつながりの中から人類学者に生じる問題解決の態度と理解したらよいのではないだろうか。そう考えると、人類学的支援は成立しないという清水の発言の真意は、人類学者に支援はできないということではなく、一見支援とは見えないような人類学的介入を続けることこそが、人類学者ならではの支援への取り組み方であるという提案だったと、筆者には思えてくる。

専門職としての実践人類学

2012年12月15日、国立民族学博物館にて国際ワークショップ「グローバル支援のための実践人類学：研究と実践のキャリア・プランニング」を開催した。先述のワークショップでは、人類学的支援を大学等の教育研究職に就いている人類学者の選択肢として議論したが、本ワークショップでは、職業として支援活動に従事する場合を想定した。いわばパートタイムではなくフルタイムで行なう人類学的支援を検討してみようとしたのである。そのために注目したのが実践人類学という概念である。

リオール・ノラン（パデュー大学）は、国際開発のコンサルタント経験が豊富で、開発人類学、実践人類学に関する論考を多数発表している（たとえばノラン 2007）。彼は、国際開発や福祉、環境等の実践的課題にパートタイムで関与する人類学者を応用人類学者（applied anthropologist）、フルタイムで関与する者を実践人類学者（practicing anthropologist）と呼び、アメリカ人類学の1つの特徴は、前者だけでなく後者の活動が盛んであることだと指摘した。その背景には、博士の学位を取得した人類学者の中で大学へ就職する者はむしろ少数派であるという実態がある。こうした実践人類学者たちの存在は、人類学を専門分野（discipline）としてだけでなく、専門職（profession）として認識する必要があること、そして、専門職としての人類学の仕事は、大学等の教育研究職に限定されないことを意味している。

それでは実践人類学者は、支援活動にどのような貢献ができるのだろうか。ワークショップ後半では、国際開発に従事した経験をもつ人類学者3人が、各自の経験を披露した。佐藤峰（JICA 研究所）は、ニカラグアで取り組んだ10代若者向けの性／情操教育に関する JICA プロジェクトにおいて、指導マニュアルにあった「自尊心」等の専門用語を現地の若者ことばに置き換える作業や、国際協力銀行（JBIC）において、社会開発概念を銀行の円借款業務に反映させるための工夫について語った。このような佐藤の活動は、国際協力の場における一種の「文化の翻訳」であるといえよう。

福武慎太郎（上智大学）は、東ティモールで従事した NGO 活動について発表した。福武にとって、住民の視点から村落開発に取り組むという NGO の理念は、当初、魅力的でやりがいのあるものに思えたが、やがて NGO の現地スタッフの給与体系や、現地の習慣を尊重しない勤務形態に矛盾を感じる

ようになったという。こうした事態を改善するために福武は、NGO の組織文化を相対化して捉えることができる人類学的な視点をもった人々の参入が有効であると提案した。

藤掛洋子（横浜国立大学）は、青年海外協力隊員としてパラグアイで活動した後、人類学／ジェンダー研究者となった経歴や、その後 JICA プロジェクトの専門家としてエンパワーメント評価手法を考案したり、パラグアイの子供支援のために NGO を立ち上げたりした経験を報告した。藤掛は、こうした活動が、実践面だけでなく研究面にも有効であることを指摘した。支援活動を通じて、開発の現場や途上国社会の底辺にいる人々の実態を直視し、研究が過度に理想的、イデオロギー的になることを戒めることが可能となるからである。

今後の展望

2つのワークショップを経て、人類学的支援のアイデアが少しずつ固まってきた。研究と支援とを混同すべきではないが、現実的にはそれらは表裏一体であることが多い。したがって人類学的支援のためのフィールドワークでは、臨機応変かつ慎重な態度が求められることになる。またフィールドとの長期のかかわり合いの中から予期せぬ形で生じるコミットメントを良質の人類学的支援とみなすこともできるし、期間限定のプロジェクトに専門家として参加し、与えられたタスクに対して何らかの結果を出すことも人類学的支援の1つの形だろう。

ノランは民博のワークショップの最後で、日本の人類学への期待を述べた。アメリカ合衆国では実践人類学の制度化が進行しているが、それは同時に、アカデミックな人類学と実践人類学とが分断されているということでもある。その意味で、まだ両者が未分化な状態にある日本の方が、人類学に根ざした支援を実現できる可能性が高いのではないかと、というのがノランの意見である。これを受け筆者は、当面は、さまざまなスタンスをとりながら研究／支援の双方をめざす多様な取り組みを人類学的支援と呼んで、経験を蓄積、共有していくことが重要だと考えている。

「支援の人類学」プロジェクトの最後の活動は、2013年3月に予定されているアメリカ応用人類学会での分科会発表である。日本型実践人類学、あるいはそれを人類学的支援と言い換えて、これまでの議論を提示し、国際的な評価を受けたいと願っている。

【参考】

小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治編 2011『支援のフィールドワーク：開発と福祉の現場から』世界思想社。

清水 展「災害、先住民の誕生、文化人類学の再想像＝創造？：ピナトゥボ山大噴火（1991）後のアエタ被災者と私自身の経験から」第46回日本文化人類学会研究大会、2012年6月24日。

ノラン、リオール 2007『開発人類学：基本と実践』関根久雄他訳 古今書院。

すずき もと

先端人類科学研究部准教授。専門は開発人類学、ラテンアメリカ文化論。主な著書に『国際開発と協働：NGOの役割とジェンダーの視点』（共編著 明石書店 2013年）『ラテンアメリカ』（共編著 朝倉書店 2007年）、論文に『開発人類学の展開』（『開発援助と人類学』明石書店 2011年）、「プロジェクトからいかに学ぶか：民族誌による教訓抽出」（『国際開発研究』17（2）2008年）など。